

北見工業大学における日本事情の実践例について

鈴木 衛 ※

A Case Study on Teaching Methods Applied to the Course “Topics on Japan” at Kitami Institute of Technology

Suzuki Mamoru

Abstract

There has been a wide range of discussions regarding the course of “Topics on Japan” taught at Kitami Institute of Technology (KIT) such as on its importance as learning subject and applied teaching methods, adopting a trial and error approach in education trying to adapt to changing times.

Although KIT provides courses to acquire basic academic knowledge, there were no courses offered to learn about Japanese society itself, which is why the course “Topics on Japan” was newly established in April 2014.

A survey we conducted with our students has shown that although the number of participants enrolling in the course increased significantly, we also encountered a variety of problems. For example, it was found that there was a discrepancy between the degree of interest in the subject and the degree of satisfaction after class. The results show that at this stage, several years after the introduction of the course, it is necessary to review the course again and consider a teaching method that enhances the learning effect.

At the same time, for the further development of this course, it is essential to consider the role and position of the university within its local environment, its contribution to the region, tourism and regional revitalization.

1. はじめに

今日、多くの日本の大学において、主に留学生を対象とした「日本事情」

※ 北見工業大学地域国際系・国際交流センター講師

の授業が実施されている。この「日本事情」の開設に関しては、今から 58 年前の 1962（昭和 37）年に当時の文部省が全国の大学に本科目の開設を通知として出している。現在に至るまで、多種多様な教育内容、指導方法により、本科目が取り扱われてきたことは、様々な論文や実践例からみても明らかである。しかし、常に授業内容の方向性など、本科目に関する議論は絶えず、現在に至っても多角的視点から問題が提起されている。そのような状況下において、各大学では、それぞれの方針により授業を実施しているわけではあるが、共通点としては、日本社会全体に関する理解の増進が挙げられる。

本学では、実際に日本文化に触れることで、視野の拡大及び異文化理解の増進を図ることを目標にし、テーマ毎に課外研修（現地体験）も行っている。筆者担当のクラスでは、3 週間で一つのテーマについて取り組み、全 5 テーマを各年度前期で実施している。しかし、履修対象者が理系の短期留学生であるため、日本語能力の高低差やテーマに対する興味度と満足度の乖離など、いくつかの問題が生じていることが明らかになった。

そこで、本稿においては、日本事情の導入の経緯と概要、授業内容について説明し、その後、アンケート調査の結果と問題点、対策についてみていくことにする。そして、最後に、本科目を今後どのような位置づけを行うのかについても筆者の見解を述べることにする。なお、本稿は、2016 年 10 月 22 日に台湾日語教育学会日語教学研究発表会（於：国立臺中科技大学）において発表した内容をまとめたものであり、研究対象期間は、2014 年度前期から 2016 年度前期までである。

2. 日本事情の導入の経緯と概要について

本学において日本事情が授業に導入されたのは、2014 年度からである（表 1 参照）。当時の導入背景には、これまで基礎的な学力を習得する科目は存在していたが、日本社会について学べる科目がなかったため、履修科目数の増加を検討していた時期でもあった。日本語担当教員 2 名が相談を行い、他大学の科目等を参考にしながら導入を決定し、既定の変更に至っている。

表 1 「日本語科目に関する規定」

別表Ⅱ（第 40 条関係）					別表Ⅱ（第 40 条関係）						
授業科目	授業方法	単位	1 年		備考	授業科目	授業方法	単位	1 年		備考
			前	後					前	後	
論文日本語	演習	2		2		論文日本語	演習	2		2	
ビジネス日本語	演習	2		2		ビジネス日本語	演習	2		2	
※初級日本語 1	演習	2	②		②	特別聴講生科目	演習	2	②		②
※初級日本語 2	演習	2	②		②	特別聴講生科目	演習	2	②		②
※初級日本語 3	演習	2	②		②	特別聴講生科目	演習	2	②		②
※初級漢字	演習	2		2		特別聴講生科目	演習	1		1	
中級会話	演習	2		2		特別聴講生科目	演習	1		1	
中級文法	演習	2		2		特別聴講生科目	演習	1		1	
日本事情	演習	2		2		特別聴講生科目	演習	1		1	
計		18		18		計		18		18	

注 1 「論文日本語」2 単位又は「ビジネス日本語」2 単位は、「英語講読 1 A」1 単位、「英語講読 1 B」1 単位の合計 2 単位又は選択科目 1 A（ドイツ語、中国語）のうち 1 科目）2 単位の科目に代えることができる。
 2 表中、※印の授業科目は前期及び後期に開講する。
 3 特別聴講生科目は特別聴講生以外の学生も履修することができる。ただし、修得した単位は、学則第 49 条第 1 項に規定する卒業に必要な単位に参入しない。

出所：（左）『北見工業大学シラバス 2014 年度』、（右）『同左 2015 年度』

本科目は、2名の教員が前後期別に授業を担当し、実施している。その内、筆者は、各年度前期に本授業を担当してきた。新カリキュラム設置当時は、通年科目、2単位としていたが、半年で帰国する学生への対応として、2015年度より、前期、後期それぞれ異なる科目名とし、単位数も1単位に変更した(表1参照)。履修者数は、2014年度前期6名、後期1名、2015年度前期4名、後期16名、2016年度前期16名となっている。このように、半期での履修が可能になったこともあり、履修学生の増加に至っている。

次に、筆者が担当している「日本事情1」の概要は、「多くの日本文化に触れることで、視野の拡大及び異文化理解の増進を図ること」とし、達成目標は、「実際の経験を通じ、日本社会を理解すると共に、自国とは異なる異文化を肌で感じる」と明記している。この目標を達成するため、授業の構成は、3週間で一つのテーマを取り上げ、第1週「予備知識の習得」、第2週「課外研修」、第3週「まとめ・発表」を行っている。2016年度前期のテーマに関しては、①北見の歴史、②和菓子、③アイヌ文化、④酪農、⑤流氷についての五つを設定した。テーマの選定は、教師自らが行っているが、その際に配慮している点は、本学の国際交流活動等で取り扱いのないテーマ(生け花、茶道、着付けを除く)且つ北見、オホーツク圏、道東地域との関連のテーマに絞り、選定を行っている。初回の授業では、授業概要の説明を行い、学生のニーズと合致しない場合は、履修登録変更期間内に、履修の変更を行うよう指示を出している。

この他、本学では、「日本事情」の科目以外にも類似した科目が存在する。一つは、「国際交流論」(学部3年次前期、2単位)で、他方は、「異文化理解」(学部1~3年次各期・1単位)である。両科目共に異文化理解を深めることは共通しているが、前者は、共通講座の英語教員が担当し、海外の事例を踏まえながら、講義形式で知識の習得を主に実施している。後者は、国際交流センター長が、自国と他国の文化の違いについて学生参加型の授業を用い、日・英二か国語にて実施している。

また、道内7つの国立大学の内、本学を除く6大学で、「日本事情」を開講している大学は、北海道大学、小樽商科大学、帯広畜産大学の3大学であった。しかし、帯広畜産大学の場合は、対象が日本人学生であり、他の2大学(対留学生)とは事情が異なっていた。北海道教育大学においては、同様の科目名の授業は存在しなかったものの、「日本語と日本文化I」の授業にて、類似した授業が行われていた。室蘭工業大学、旭川医科大学では、本科目に該当する授業はなかった。

このように、学内においては、類似する科目は存在するものの、それぞれ

異なる内容の授業を実施している現状にある。しかし、短期留学生を対象に開講されている「日本事情1」、「日本事情2」の科目については、日本人学生からも履修したいという希望の声が寄せられ、潜在的な需要が存在することも確かである。今後、既存の履修枠を取り払うか否かの検討も早晩、必要になってくるものと思われる。また、他大学においても同様の授業を実施している現状を踏まえ、今後遠隔授業を利用した授業の導入と幅広い情報の提供、単位互換制度の在り方も広く考える時期にきているように思われる。

3. 授業内容について

本科目は、各年度前期において、5つのテーマを取り上げ、授業を実施している。テーマ及び授業の進め方、発表テーマは、表2の通りである。教員は、テーマ及び発表テーマを設定し、学生は興味のある発表テーマを自主的に選択し、発表を行っている。発表時間は、各チーム10分とし、その後質疑応答、教員からの説明の捕捉を行っている。チーム分けの際には、日本語レベル及び国籍を考慮し、チーム分けを行っている。また、本科目は、「アクティブ・ラーニング」を取り入れ、学習定着率を高めることを目指しているため、より積極的な授業への関与が必須である。実践の際の交通に関しては、大学のバスを利用しているため、交通費は不要であるが、施設の入場料や材料費は学生負担となっている。また、2016年度に関しては、テーマ4及びテーマ5の課外研修の際に、日本人学生各1名の参加があった。次に、実践では、各自筆記用具と記録媒体を準備し、実践に臨んでいる。それらを踏まえ、まとめの作業では、感想文、Map作成、映像を通したディスカッションを行った。こうして、発表、実践、まとめを行い、一つのテーマを完結し、単に知識の習得のみならず、経験を踏まえた新しい視点での物の捉え方を養えるようにもしている。

表2「日本事情1のテーマ、授業の進め方、発表テーマについて」

テーマ	授業の進め方（3週間）	発表テーマ
1 北見	実践→資料作成→発表	①薄荷、②オーロラ、③動物
2 和菓子	発表→実践→まとめ (感想文)	①歴史、②種類、③材料、④和菓子と季節、 ⑤菓銘とは、⑥和菓子と五感
3 アイヌ	発表→実践→まとめ (Map作り)	①歴史、②神話、③言葉、④食文化、⑤居住、 ⑥衣装
4 牧場	発表→実践→まとめ	①牛の種類、②牛の生態、③生乳生産の需要

	(映像制作)	と供給、④酪農家と飼育頭数、⑤牛乳と健康、 ⑥TPP と酪農
5 流水	発表→実践→まとめ (映像制作)	①流水の概要、②流水観光、③流水に生きる動物、④流水と人間の関わり、⑤流水に関する商品、⑥アザラシ

出所：教案をもとに筆者作成。

4. 授業アンケート結果について

本科目においては、これまで大学で実施している「授業アンケート」とは別に、2016 度前期においては、より詳細なアンケート調査を実施し、授業内容の見直しに役立つ情報収集を行った。項目としては、「Ⅰ基本情報について（問 1～問 7）」、「Ⅱ授業について（問 8～問 12）」、「Ⅲ発表について（問 13～問 17）」、「Ⅳグループワークについて（問 18～問 22）」、「Ⅴ今後の授業について（問 23～問 27）」の五項目全 27 問である。対象者は、本科目を履修している 16 名で、全員より回答があった。

まず、「Ⅰ基本情報について」では、日本語のレベルを判断する質問になっている。問 1「日本語学習歴」について尋ねたところ、6 か月以上 1 年未満が 6 人、1 年以上 1 年半未満が 4 人、1 年半以上 2 年未満と 2 年以上 2 年半未満が各 2 人、6 か月未満と 2 年半以上は各 1 人であった。問 2「日本語検定有資格者」は、N1 が 2 人、N2 が 3 人、他 11 人は無資格であった。問 3「国籍」は、中国、台湾が各 6 人、韓国が 4 人であった。問 4「性別」は、男性が 12 人、女性が 4 人であった。問 5「学年」は、3 年次が 6 人、4 年次が 8 人、M2 が 2 人であった。問 6「日常生活での日本語使用の頻度」は、頻度（中）が 9 人、頻度 4 が 4 人、頻度 5（高）が 3 人であった。問 7「日本人の友人数」は、5 人以下が 9 人、6 人以上 10 人以下と 11 人以上 15 人以下が各 3 人、16 人以上 20 人以下が 1 人であった。このように、基本情報からは、初級日本語学習者が多く存在することが明らかになった。また、日本語の使用頻度に関しては、学習者のレベルを問わず、日常生活上必要なため、必然的に使用頻度が高いことが結果に反映されている。さらに、日本人の友人数については、5 人以下が半数を占めていたが、残り半数も多くの日本人の友人がいることがわかった。

次に、「Ⅱ授業について」では、授業満足度、授業習熟度を把握するために、5 つの質問を行っている。問 8「本科目を履修した理由」は、日本文化を学ぶためが 7 人、多くの体験ができるからが 4 人、友人に誘われたためが 2 人、課外授業があったから、語学の練習のため、異なるテーマについて学

習できるからが各 1 人であった。問 9「授業の満足度」は、5 段階中 4（やや高い）が 5 人、5（非常に高い）が 11 人であった。問 10「授業の進め方（速さ）」は、普通が 13 人、若干遅い、若干早い、非常に速いが各 1 人であった。問 11「授業実施前のテーマ別興味度及び授業実施後の満足度」は、表 3 の通りである。これによると、授業前と授業後の上位の興味度に変化が生じており、北見と流氷において増加していたが、その他はやや減少に転じていることがわかった。問 12「授業の習熟度」は、5 段階中 4（やや高い）が 8 人、5（高い）が 4 人、3（普通）が 3 人、2（やや低い）が 1 人であった。このように授業については、積極的な理由により本科目を履修していることがわかった。また、授業満足度も非常に高い割合であり、進め方も適切であったことが明らかになった。そのことが、結果として習熟度の面でも高い結果に結びついていることがうかがえる。

表 3 「問 11 授業前興味度及び授業後満足度について」(n=16)

	テーマ	順位	授業前 興味度		授業後 満足度	
			人	%	人	%
1	北 見	1位	1	6.25	3	18.75
		2位	2	12.5	3	18.75
		3位	4	25	3	18.75
		4位	3	18.75	2	12.5
		5位	6	37.5	5	31.25
2	和菓子	1位	5	31.25	2	12.5
		2位	5	31.25	4	25
		3位	3	18.75	3	18.75
		4位	2	12.5	5	31.25
		5位	1	6.25	2	12.5
3	アイヌ	1位	2	12.5	3	18.75
		2位	3	18.75	1	6.25
		3位	2	12.5	6	37.5
		4位	4	25	1	6.25
		5位	5	31.25	5	31.25
4	牧 場	1位	5	31.25	6	37.5
		2位	4	25	2	12.5
		3位	5	31.25	4	25
		4位	2	12.5	3	18.75
		5位	0	0	1	6.25
5	流 氷	1位	3	18.75	2	12.5
		2位	2	12.5	6	37.5
		3位	2	12.5	0	0
		4位	5	31.25	5	31.25
		5位	4	25	3	18.75

出所：アンケート結果をもとに筆者作成。（赤：増加、青：減少）

「Ⅲ発表について」では、準備段階及び発表段階に関する5つの質問を行った。問13「発表の準備時間（平均）」は、3時間が最も多く5人、次いで6時間以上が4人、1時間、2時間、5時間が各2人、4時間が1人であった。問14「発表の練習時間（平均）」は、1時間未満と1時間以上2時間未満が各6人、2時間以上3時間未満が3人、3時間以上が1人であった。問15「発表の満足度（自分のチーム）について」は、5段階中3（普通）が5人、4（やや高い）が8人、5（高い）が2人であった。問16「発表の理解度（他のチーム）」は、5段階中3（普通）が10人、4（やや高い）と5（高い）が各2人、1（低い）と2（やや低い）が各1人であった。問17「わかりやすかった発表内容について」は、写真を多く取り入れた発表が6人、和菓子と流氷の発表が各2人、ゆっくり話した発表、正確な日本語を使った発表、アイヌの発表、牧場の発表が各1人であった。このように発表内容については、多くの学生が授業時間数以上の時間をかけて準備していることがわかった。また、時間の幅はあるものの、発表の練習時間も一程度確保しており、積極的な授業への関与が見受けられる。さらに、自チームと他チームの発表の満足度は、共に満足度は高いものの、自チームの方がより高い満足度を占めていた。問17のわかりやすかった発表については、写真を多く取り入れたものが見やすかったとしており、視覚的な学習方法が効果的であることが明らかになった。

「Ⅳグループワークについて」では、学生同士の協同作業における使用言語と習得できた能力の実態把握を行うべく、5つの質問を行った。問18「使用言語について」は、日本語が5割以上、韓国語と中国語、英語が2割未満であった。問19「母語を使用した理由について」は、同一国籍で相互交流が便利・効果的が9人、日本語があまり話せない、通じないが各2人、正確に理解するため、日本語が思い出せない、使用したことはないが各1人であった。問20「他人がその国の言語を使用した時の対応について」は、日本語でその意味を尋ねるが5人、日本語で話すように促すが4人、他国の言語を勉強するが3人、ボディーランゲージが2人、理解してもらえるように頑張る、翻訳機能を使用するが各1人であった。問21「日本語を使用する際の難しい点について」は、自分の思いを伝えることが12人、単語量が少ないが3人、敬語が1人であった。問22「習得できた能力について」は、社会人基礎力の3能力12要素について質問を行った。結果は表4の通りである。「前に踏み出す力」及び「考え抜く力」では、各3要素¹において、5段

¹ 前に踏み出す力(1)主体性、(2)働きかけ力、(3)実行力、考え抜く力、(4)課題発見力、(5)計画力、(6)創造力

階中 4 (やや高い) が 5 割以上を占めていた。「チームワークで働く力」は、6 項目²中、発信力を除く 5 項目においては、習得状況は 5 段階中 4 (やや高い) 以上が 5 割以上を占めていた。発信力に関しては、習得状況 3 (普通) が 5 割であった他、ストレスコントロール力、状況把握力においても習得状況 3 (普通) が 4 割弱と 3 割弱を占めていた。

表 4 「問 22 習得できた能力」について (n=16)

能力	能力要素	習得状況	人	%	能力	能力要素	習得状況	人	%
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	1 (低)	0	0	チームで働く力 (チームワーク)	発信力	1 (低)	0	0
		2	0	0			2	1	6.25
		3	4	25			3	8	50
		4	9	56.25			4	5	31.25
		5 (高)	3	18.75			5 (高)	2	12.5
	働きかけ力	1 (低)	0	0		傾聴力	1 (低)	0	0
		2	3	18.75			2	0	0
		3	5	31.25			3	0	0
		4	6	37.5			4	9	56.25
		5 (高)	2	12.5			5 (高)	7	43.75
	実行力	1 (低)	0	0		柔軟性	1 (低)	0	0
		2	0	0			2	0	0
		3	5	31.25			3	1	6.25
		4	8	50			4	8	50
		5 (高)	3	18.75			5 (高)	7	43.75
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	1 (低)	0	0	状況把握力	1 (低)	0	0	
		2	1	6.25		2	1	6.25	
		3	3	18.75		3	5	31.25	
		4	6	37.5		4	8	50	
		5 (高)	6	37.5		5 (高)	2	12.5	
	計画力	1 (低)	0	0	規律性	1 (低)	0	0	
		2	1	6.25		2	1	6.25	
		3	6	37.5		3	2	12.5	
		4	4	25		4	6	37.5	
		5 (高)	5	31.25		5 (高)	7	43.75	
	創造力	1 (低)	1	6.25	ストレス コントロール力	1 (低)	0	0	
		2	1	6.25		2	0	0	
		3	3	18.75		3	7	43.75	
		4	9	56.25		4	6	37.5	
		5 (高)	2	12.5		5 (高)	3	18.75	

出所：アンケート結果をもとに筆者作成。

「V 今後の授業について」では、取り入れてもらいたいテーマや日本人学生の参加希望の有無など全 5 つの項目について質問を行った。問 23 「取り入れてもらいたいテーマ」の上位は、弓道が 4 名、和服体験、伝統芸術文化 (茶道・華道・狂言・京舞・文楽・雅楽)、お祭り、剣道、温泉が各 3 名、高校見学が 2 人であった。問 24 本授業で取り入れてもらいたいものは、テーマ別記念冊子の作成、発表の仕方が各 2 人、討論、質問の仕方、これまで

² (7) 発信力、(8) 傾聴力、(9) 柔軟性、(10) 状況把握力、(11) 規律性、(12) ストレスコントロール力

通りが各 1 人、特になしが 9 人であった。問 25「日本人の参加の有無について」は、希望するが 13 人、希望しないが 3 人であった（表 5 参照）。希望する理由としては、学習以前に友人関係や同世代の考え方を求めている学生が 7 割近くに上った。希望しない理由については、日本語力の問題によるものであった。問 26 受講者数の規模については、11 人～15 人までが 10 人と最も多く、6～10 人、10 人～15 人が各 3 人であった。問 27 テーマの希望数については、現状と同様の 5 つが最も多く 8 人、次いで 7 つが 4 人、6 つが 3 人、4 つが 1 人であった。

表 5 「問 25 本授業に日本人学生も参加することを希望するか。」(n=16)

希望の有無	人	理由	人	%
希望する	13	日本人と友達になりたい	5	39
		同世代の考え方を知りたい	4	31
		会話練習のため	2	15
		協同作業をしたい	1	8
		日本語学習に役立つから	1	8
		様々な異なる日本語に触れたい	1	8
希望しない	3	対話が困難	1	33
		学生が多すぎると相互交流が難しくなるから	1	33
		日本人の視点も重要だが、教師が日本人のため不要	1	33

出所：アンケート結果をもとに筆者作成。

備考：「希望する」を選択した 1 名の留学生がその理由を複数回答。

今回のアンケート結果において、様々な問題点も生じていることが明らかになった。その主な問題点と対策の一例は、表 6 の通りである。この他、発表内容の問題（発表の仕方、スライドの作り方等）や課外研修に臨む姿勢（記録の取り方、問題意識の持ち方等）等、問題は各所に存在するが、これらについては、時期を改めて検討したいと考えている。

表 6 設問項目別問題点と対策の一例

設問項目	問題点	対策の一例
I 基本情報	日本語能力の差	<ul style="list-style-type: none"> • 学生を選別する。 • 協同学習を導入する。
II 授業について	テーマ別興味度と授業後の	<ul style="list-style-type: none"> • 学生にテーマを選択させる。

	満足度の乖離	
Ⅲ 発表について	他チームの発表への理解度の低さ	・発表を聞き、理解する能力を身に付けさせる。
Ⅳ ゴールデンウィークについて	母語の使用と発信力の弱さ	・母語を使わず、日本語または英語で話すことを徹底させる。
Ⅴ 今後の授業について	日本人学生の授業への参加	・日本人学生の履修も認める。

出所：アンケート結果をもとに筆者作成。

5. おわりに

本稿では、本学における「日本事情」の実践例について、本科目の導入の経緯と概要について、授業内容について、授業アンケート結果と問題点及び対策についてみてきた。本学においては、2014年度より導入しているため、他大学に比べ実施期間が浅く、PDCA（計画・実行・評価・改善）を繰り返しながら、新しい日本事情の実践と確立を目指している時期でもある。また、履修学生が、短期留学生のため、半年又は一年で帰国する学生相手のため、どこまで踏み込んだ教育を実施するべきかについても苦慮している点も歪めない。実際に、アンケート結果からは、教員の予想とは異なる結果が随所に見受けられ、学生と教員との認識のズレを明白に証明された結果になっている。本学における昨今の学生は、アニメ文化から日本への興味を抱き、来日につながっているケースが多く、文化的側面をどのような形で学術的に転換させるかについても今後深刻に検討する必要があると感じている。この他、本学の位置づけ（「地域と特色分野の教育研究（地域）」）や観光立国の施策、地域の活性化と併せた本科目の発展性も考えていく必要がある。つまり、「地域」に位置づけられている本学は、これまで以上に地域との連携が強化される必要があるため、大学所在地である北見の他、オホーツク圏、道東地域といった資源を題材にした教育の必要性も挙げられる。また、観光のブランド化との関連では、「ジャパnbrand調査 2016」（電通）で地域の人気第一位が「北海道」に挙げられていることもあり、この優位性を用いて、科目を通じた観光商品のブランド化に寄与できればと考えている。このように、現状の問題点を踏まえつつ、今後、さらにダイナミックな課題発見・解決型授業を展開していきたいと考えている。今後、本科目と発展性との関連については、次稿に委ねることとする。

参考文献

1. 著書

小田隆治・杉原真晃(2010)『学生主体型授業の冒険』ナカニシヤ出版

細川英雄(1999)『日本語教育と日本事情』明石書店

同著(1994)『実践日本事情入門』大修館書店

2. 論文・報告

今井新悟、李在鎬(2016)「日本語・日本事情遠隔教育拠点報告 2015」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第 31 号、pp.173-181.

有田節子(2014)「初めての日本語・日本文化研修留学生の受け入れ—その意義と課題—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第 4 巻、pp.59-65.

宇塚万里子・岡益巳(2014)「日本事情科目の現状と問題に関する実証的研究」『大学教育研究紀要』第 10、pp.179-192.

土屋菜穂子(2014)「上級日本事情クラスのコースデザインと授業改善への取り組み」『青山スタンダード論集』第 9 号、pp.59-70.

松本明香(2014)「日本事情クラスで行った『防災を考えよう』の実践報告」『日本語教育方法研究会誌』第 21 巻、pp.39-47.

飯島有美子(2012)「マインドマップによるノートテイキングの試み—『日本事情』クラスにおけるドキュメンタリー映像視聴の記録として—」『関西国際大学研究紀要』第 13 号、pp.187-194.

大川英明(2011)「日本事情の知識：歴史、経済、法律、政治編」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』21 号、pp.37-70.

大塚薫(2011)「高知大学における共通教育日本語・日本事情に関する科目の問題点及び課題」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第 5 号、pp.119-136.

西谷まり(2011)「留学生のキャリア支援：全学共通教育科目『日本事情 I』における取組」『一橋大学国際教育センター紀要』第 2 号、pp.133-140.

岡益巳(2010)「異文化体験・交流を目的とした日本事情科目の諸問題」『広島大学留学生教育』第 14 号、pp.1-12.

来嶋洋美(2010)「『日本の生活と文化』をトピックにした中等教育向け読解教材の開発—英国中等教育向け日本語リソース『読む力—CHIKARA for READING』の場合—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 6 号、pp.125-137.

須長一幸(2010)「アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題—activeness 概念を中心に—」『関西大学高等教育研究』第 7 号、pp.1-11.

- 熊野七絵・品川直美他(2009)「短期訪日コースのための教材開発—『日本語ドキドキ体験交流活動集』—」『国際交流基金日本語教育紀要』第5号、pp.135-149.
- 鷲尾敦(2009)「チーム学習とディスカッションを重視した学習者参加型授業の効果」『高田短期大学紀要』第27号、pp.107-118.
- 渡辺春美(2008)「『日本事情』教育の実践的課題—2007年度の実践事例を中心に—」『高知大学総合教育センター修学・留学支援部門紀要』第2号、pp.24-40.
- 熊谷由理(2007)「日本語教室でのクリティカル・リテラシーの実践へ向けて」『WEB版リテラシーズ』第4巻2号、くろしお出版、pp.1-8.
- 山口和代(2004)「南山大学総合政策学部での日本語教育における『日本事情』の位置づけと今後の課題」『国際開発研究フォーラム第26号』、名古屋大学大学院国際開発研究科、pp.179-192.
- 西井和弥(2002)「『日本事情』科目の意義に関する一考察」『NUCB Journal of Economics and Information Science』名古屋商科大学、pp.25-33.
- 林洋子(2002)「『考える』プロセスを重視して～多文化クラスの試み～」『専門日本語教育研究』第4号、pp.35-40.
- 砂川裕一(1999)「『日本事情論』への視角—近代知批判のパーспекティブに即して—」『第11回日本語教育連絡会議報告発表論文集』、日本語教育連絡会、pp.67-71.
- 岡崎正道(1995)「日本事情教育の視角」『岩手大学人文社会科学部研究紀要』第56巻、pp.11-18.
- 三牧陽子(1994)「『日本事情』再考」『留学生指導センター年報第2号』、大阪教育大学留学生指導センター、pp.13-25.
- 礼野寛子(1993)「現代用語をキーワードにした『日本事情』」『金沢大学留学生教育センター紀要』第2号、pp.59-69.
- 友沢昭江(1989)「大学教育における『日本事情』科目のあり方」『香川大学一般教育研究』第36巻、pp.1-19.

3. インターネット

久保田竜子「日本語教育における文化」

http://www.aatj.org/resources/publications/book/Culture_Kubota.pdf

2016年4月30日アクセス

船津明生「授業のなかで日本文化・日本事情をどう教えてゆくか —AET2000を終えて—」

https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu5_folder/jisshu/2000/funatsu.html 2016年5月13日アクセス

